Ａ．聖書解釈と政治思想
オリエンテーション
導入：脳神経科学とキリスト教
１．聖書の政治思想とキリスト教社会主義
２．現代政治思想とキリスト教
Exkurs
　現代キリスト教思想とユダヤ的なもの
　宗教と科学の対話の可能性

＜前回＞ジジェクとパウロ
（１）スラヴォイ・ジジェク『脆弱なる絶対――キリスト教の遺産と資本主義の超克』
０．誰のためでもなく、何のためでもなく
・「ポストモダン時代とその「思想」とやらにみられるもっとも悲惨な状況のひとつは、宗教的な要素が様々な衣をまとって回帰していることである」
「原理主義」「〈ニューエイジ〉的精神主義から脱構築主義そのもの」(7)
・ラカン派マルクス主義者ジジェクの提案。
「戦略を逆転すること」「キリスト教とマルクス主義のあいだには直接的な系統関係があるのだ。そう、キリスト教とマルクス主義は新種の精神主義の襲撃に対して一致協力して戦うべきなのだ」、「聖パウロ」(8)、「聖パウロを離れてキリストは存在しない」(9)
１１．寛容の原理
・「「例外が[普遍的な]規則に基礎を与える」」(164)
・「真に弁証法的な問題は、連鎖と例外が直接的に一致することである」、「例外的な形象の連鎖」(165)
１２．キリストによる束縛の解除
・「キリストが（彼に先行するブッダのように)」「社会階層の停止を強調するため」、「この新しいコミュニティーは明らかに除け者たちの集団として、既存の「有機的な」グループとは正反対のものとして構成されている」、「「異常な」除け者コミュニティ」「の系譜」(175)
・「〈教会〉と、社会制度内の〈教会〉の権威を脅かす対抗-コミュニティーとして台頭した修道院」(177)
・「「愛において、そして愛という動機から、愛する者を憎め」」、「私は、かけがえのない人間として彼を愛するがゆえに、社会的-象徴的構造に取り込まれた彼の側面を「憎悪」するのである」(179)、「「社会的役割」やイデオロギー的な機能や仮面の下に隠れている「現実の人間」をみるべきである、というありふれた「ヒューマニズム的な」思想とはいっさい関係ない」「聖パウロは、断固たる「理論的反-ヒューマニズム」の持ち主である」、「「だれをも人間的な見方によって知ることはすまい」」(180)
・「「束縛の解除」は「象徴的な死」をともなっている」「法に対して死ぬ」(180)、「新たにゼロから出発する身振り」「「束縛の解除」のなかには、おそろしい暴力が存在している」「徹底的な「過去の清算」という暴力」
・「自己のいだく幻想を投影するスクリーンとして他者を利用し、他者そのものを見えな

くする。一方、真の愛は、愛する者をありのままに受け入れる」、「愛とは活動のことである」（182）

（２）スラヴォイ・ジジェク『操り人形と小人――キリスト教の倒錯的な核』

０．序――神学という名の操り人形

・「キリスト教の転覆的な力を秘めた核は」「唯物論的アプローチによってしか理解できない」、「真の弁証法的唯物論者になるためには、キリスト教的な経験を経るべきなのだ」（13）

・「人々が率直に「本当に信じた」時代は、歴史上、存在しただろうか」、「主観的にみて完全に真実であると思うこと」「に対する率直な信仰は」（13）「近代的な現象である。前近代の社会は、率直に信じたのではなく、距離をとって信じていた」（14）

・「聖パウロの使徒書簡」「人間としてのイエス」に「対して、まったく、おどろくほど無関心であることがわかる」、「イエスの死と復活という事実を確認したあと、パウロは、彼の本分であるレーニン的な仕事、すなわち、キリスト教共同体と呼ばれる新しい党を組織する仕事に向かう」、「レーニン主義者としてのパウロ」（18）

・「パウロは、ユダヤ的伝統の内部から読まれるべきである」「彼の切断が本来もっている急進性を、彼がユダヤ的伝統をいかに内部から掘り崩したかということを」、「われわれは「生成過程にあるキリスト教」を捉えることができる」（19）

１　東洋が西洋に出会うとき

・「シェリングの問い」「〈神〉の人間化、永遠性からわれわれの現実というかりそめの世界への神の降下」は「〈神〉自身の視点からみれば上昇なのだとしたら？」「〈神〉が十全な現実化を得るための」（22）

・「真の愛とは、まさしく、約束された〈永遠性〉を不完全な個人のために捨てるという、それとは反対の動き」「愛のために永遠の存在を放棄する身振り」

・「永遠性が究極の牢獄、息の詰まるような閉域であり、時間への転落だけが人間の経験に〈開け〉を導入するのだとしたら」「「顕現」という〈出来事〉」（23）

・「〈神〉が〈神〉のもとから捨て去られたことを告白するその叫びの瞬間」、「〈神〉が一瞬であれ無神論者に見える宗教」、「キリスト教は、おそろしいまでに革命的になる」「〈神〉が単に全能であるだけでは完全ではないと感じた宗教は、地上に宗教多しといえどもキリスト教においてほかない」（25）

「普遍的概念」は「死を通じて特異な単独者、「イエス・キリスト」として現れた。ここでは、普遍性が単独性に止揚されるのであって、その逆ではない。」（29）

３　〈現実的なもの〉という逸脱

・「ジャック・ランシエール」「古代ギリシアの市民たち（社会のヒエラルキー構造のなかで明確な居場所をもたない者たち）」「部分ならぬ部分」（98）

・「キリスト教的な同一化のかたち」「それは、最終的には失敗との同一化なのである」「同一化の対象は〈神〉なのだから、ここでは、〈神〉自身が失敗することがしめされねばならない、と」、「われわれは、みずからの失敗において、まさに神の失敗と同一化する」（135）

・「この転倒がいっているのは、ばかにされ、笑いものにされたわたし、自分の弱さをさらし、嘲笑の的になったわたしは、同じくばかにされ、笑いものにされたキリスト――威厳や尊厳をすっかり奪われた、究極の聖なる〈愚か者〉キリスト――と同一化する、という

ことなのだ。パウロの考えでは、偽使徒たちは強者であり、自分たちのことをえらいと考えている」(137)　２コリント 11.1-6

・「われわれが〈神〉と同一であるのは、あくまで、〈神〉が〈神〉自身と同一ではなく、自己とを放棄したとき、つまり、〈神〉とわれわれとを隔てる根源的な距離が、〈神〉そのものに「内在化」されたときである。〈神〉からの分離という根源的経験は、まさに〈神〉とわれわれをひとつにする要素なのだ。ただし、そういえるのは、われわれはそうした経験を通じてはじめて、〈神〉の根源的な〈他者性〉と正面から向き合うことになる、というありふれた神秘主義的な意味においてではない。屈辱と苦痛は、唯一の超越論的な感情であるというカントの主張と同じ意味においてである。わたしは神の至福と同一化できるという考えは、ばかげている。わたしは、〈神〉からの分離という無限の痛みを経験してはじめて、〈神〉自身（〈磔〉になったキリスト）と経験を共有することができるのだ」(138)

４　法から愛へ……そしてまた法へ

・「それ自身に固有の、特定の場所を占めることができないこうした主体は、普遍性そのものを具現している。根源的な政治的普遍性」「と、例外に基礎づけられた普遍性（たとえば、暗黙のうちにある特定の特権化し、他の集団を排除する「普遍的人権」)」「を対置したとき」「ポイントは、根源的普遍性を作動させる単独的な要因は、〈残余〉そのものである、すなわち、例外に基礎づけられた「公式の」普遍性のなかに固有の場所をもたないものである、ということだ」(164)、「排除されたものたち」、「パウロ的普遍性は、特殊な内容を容れる空虚で中立的な容器としての沈黙した普遍性ではなく、「戦う普遍性」、特殊の内容全体を貫通する根源的な分割というかたちとなって現れる普遍性である」(165)

５　差し引くこと――ユダヤ教的に、キリスト教的に

（３）スラヴォイ・ジジェク『ラカンはこう読め！』

Exkurs

宗教と科学の対話の可能性―研究と教育の視点から―

（１）はじめに

１．「科学と宗教の対話」プロジェクト（Templton 財団研究助成・南山宗教文化研究所）への具体的な提案を行うこと。

「科学と宗教の対話」＋「宗教共同体と教育機関」

↓

２．「宗教と科学の対話」について研究し教育する。

（２）対話研究へのアプローチ

３．キリスト教思想における動向。

・欧米キリスト教思想：1970 年代以降、「科学と宗教」をめぐる研究状況は、きわめて活発。

・日本との大きな相違

４．「科学と宗教」関係論の三つの視点

・歴史的視点：古代科学、中世科学（イスラム科学、12 世紀ルネサンス)、

近代科学（コペルニクス革命～ 17 世紀の科学革命）、現代科学

・理論的視点：自然学・形而上学、自然神学、宇宙論／生命論／心理学・心の理論

・倫理的実践的視点：生命倫理、環境倫理、科学技術論（原発）→文明論、社会科学

↓

1970 年代以降：科学技術のもたらした変動・危機という背景における「科学と宗教」関係論の活性化　　cf. 弁証法神学の時代（～ 1960 年代）

（３）個人の研究履歴、あるいはこれまでの経験から：

５．方法・形式：二つのタイプの研究を結びつけること

・個人研究：

・共同研究：

「宗教と科学」研究会（https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/science）、教科書の刊行

“Global Perspectives on Science & Spirituality”（gpss）

「マクグラス翻訳」研究会

６．研究テーマ

・ニュートンとニュートン主義、

・進化論論争・生命論（生命倫理）、環境思想（環境倫理）

・脳神経科学と心

・科学技術・原発

・自然神学と形而上学、現代神学の諸動向（プロセス神学、パネンベルク、トランス、マクグラス）

創発主義、システム理論における自己組織化、オートポイエーシス論、情報理論、科学哲学・分析哲学

（４）「科学と宗教」対話論の留意点

７．対話の非対称性

Lisa L. Stenmark, *Religion, Science, and Democracy. A Disputational Friendship*, Lexington Books, 2013.

Chapter Eight: A Disputational Friendship

Partisanship for the World / Religion and Science as a Disputational Friendship / Defending Discourse（Epistemic Inequality, Complexity and Expertise, Incommensurability: Worlds Too Far Apart, The Cuture Wars: When Worlds Collide）

One way to understand the relationship between religion and science is as a "disputational friendship," which is based on Hannah Arendt's understanding of a public friendship that is "partisanship" for the world.（195）

"argumentative companionship" that does not seek out simularity in order to experience the warmth and comfort of familiality with other human beings, but seeks out points of difference in order to provoke conversation and preserve the plurality of the world.（196）

Like the practices of religion and science, our identities are plural, even though they seem to be unitary.（199）

plurality, individual perspectives on a common world

epistemic inequality, epistemic privilege（203）

Epistemic equality includes more than the opportunity to speak; it requires attentiveness to social inequality, because social inequality can make it difficult for some groups to make their reasons publicly avalable or publicly convincing, because of such things as a lack of education or access to information technologies.（204）

our scientifically oriented culture, we create zones of trust（205）

I believe that scientists are capable of listening to and learning to judge non-scientific reasons.（208）

Conflict is an inevitable by-product of the constant negotiation and evaluation of a living practice or culture.（211）

For science and religion to fulfill their social responsibility to public life, neither can be relegated to a separate sphere but must instead engage one another.（211）

↓

著名な科学者による講演やシンポジウムは宣伝としては有益でありネットワーク形成にも意味がある。しかしそれだけでは、実質的な研究の進展にはならないだろう。

８．アーレント：遺稿集『政治の約束』

古代ギリシャのポリス→政治的なもの

What distinguishes the communal life of people in the polis from all their forms of human communal life --- with which the Greeks were most certainly familiar --- is freedom. ... Being free and living in the polis were, in a certain sense, one and the same.

Here the meaning of politics, in distinction to its end, is that men in their freedom can interact with one another without compulsion, force, and rule over one another, as equals among equals, commanding and obeying one another only in emergencies --- that is, in times of war --- but otherwise managing all their affairs by speaking with and persuading one another.（116-117）

「ポリスにおける人々の共同生活をその他のあらゆる形態の人間の共同生活――それらについてギリシャ人たちは、間違いなく、よく知っていたはずだ――から区別するのは、自由である。……自由であることとポリスに住むことは、ある意味では、同一のことだった」（アーレント、2008、148）、「政治の意味とは、以下の通りとなる。すなわち、自由な人間たちが、強制も暴力（force）も互いの支配もなく、平等者中の平等者として、相互に交流することができる。また、互いに命令と服従を行うのは例えば戦時のような緊急事態が発生した場合のみであり、そうでない限りは、互いに語り合い説得し合って自分たちのすべての問題を処理することができるということである。」（同、149）

政治：自由な共同性において、相互の説得のための言論を用いた合意形成の営み

・ハンナ・アレント『政治の約束』ジェローム・コーン編、高橋勇夫訳、筑摩書房、2008 年。

Hannah Arendt, *The Promise of Politics*（Ed. by Jerome Kohn）, Schocken Books,

2005.

９．アーレント：人間存在の複数性の上に政治思想を構想。

政治的なものの人間学的条件である「行為」（action）　→　その脆さへのと議論。

「行為 action とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行なわれる唯一の活動力であり、複数性という人間の条件、すなわち地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、複数の人間 men であるという事実に対応している」（アーレント、1958、20）、「多種多様な人びとがいるという人間の複数性は、行為と言論がともに成り立つ基本的条件であるが、平等と差異という二重の性格をもっている。」（同、286）、「人びとは行為と言論において、自分がだれであるかを示し、そのユニークな人格的アイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間世界にその姿を現わす。」（291）

・ハンナ・アレント『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学術文庫、1994 年。

Hannah Arendt, *The Human Condition*（1958）, 2nd Edition,The University of Chicago Press, 1998.

10．継続的な対話に何が必要か　→　集中的な研究グループを核として

（５）むすび・提案

11．いくつかのケースに絞り、集中的に作業を進め、形にする、そして拡張する

・キリスト教と自然科学、大学での宗教学の授業

12．複数の研究会を並行して開催し、成果を統合する。

・多様な試みを基盤にした研究組織

・京都大学での研究会の再開

＊芦名定道　「科学と宗教」　関連

Ａ：研究成果報告書

１．「生命倫理とキリスト教の創造論」（神野慧一郎『心身問題とバイオエシックスにおける生命概念との関わり合いについての考察』平成 2、3 年、科学研究費補助金（一般　研究Ｃ）、研究成果報告書、49-55 頁）

２．「現代キリスト教神学の生命観」（神野慧一郎『心身問題とバイオエシックスにおける生命概念との関わり合いについての考察』平成 4、5 年、科学研究費補助金（一般研　究 Ｃ）、研究成果報告書、57-68 頁）

３．『近代科学の成立と自然神学の関連をめぐってーニュートン主義の神学的受容を中心にー』（平成 10、11 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）、研究成果報告書）

４．『近代科学の成立と自然神学の関連めぐってーニュートン主義から理神論、進化論へー』（平成 12、13 年度　科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））、研究成果報告書）

５.『近代科学の成立とキリスト教自然神学の生命論ーエコロジーの視点からー』(平成 14、15 年度、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））、研究成果報告書）

６.『現代の生命論・環境論との関わりにおけるキリスト教自然神学の再構築』(平成 16、17 年度、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ）（２））、研究成果報告書）

７．『社会科学との関連におけるキリスト教自然神学の再構築―環境論と経済学を焦点として―』（平成 22 ～ 24 年度、科学研究費補助金（基盤研究（Ｃ））、研究成果報告書）

（８．「自然神学の言語論的転回とその社会科学への拡張―聖書・環境・経済―」平成 25 ～ 27 年度、科学研究費補助金（基盤研究（C））

B：単著

１．『宗教学のエッセンス』 北樹出版 1993 年

２．『自然神学再考―近代世界とキリスト教―』晃洋書房　2007 年

C：共著・編著

１．現代キリスト教思想研究会『科学時代を生きる宗教－過去と現在、そして未来へ－』北樹出版、2004 年。

２．芦名定道、星川啓慈編『脳科学は宗教を解明できるか？』春秋社、2012 年。

D：訳書・共訳

１．トーマス･F･トランス『科学としての神学の基礎』（水垣渉との共訳）、教文館、1990 年。

２．A.E..マクグラス『「自然」を神学する――キリスト教自然神学の新展開』（杉岡良彦、濱崎雅孝との共訳）、教文館、2011 年。

E：論文

１．「シュワイツァーと現代神学の生命観」（シュワイツァー日本友の会『シュワイツァー研究』第 22 号、1994 年、5-26 頁）。

２.「環境問題とキリスト教思想」(日本基督教学会『日本の神学』第 36 号、1997 年、101-108 頁）。

３．「キリスト教と近代自然科学－ニュートンとニュートン主義を中心に－」（京都大学文学部『京都大学文学部研究紀要』第 38 号、1999 年、147-244 頁）。

４．「ティリッヒ　生の次元論と科学の問題」（現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』創刊号、2000 年、1-16 頁）。

５．「ティリッヒとエコロジーの神学」（現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第４号、2002 年、1-16 頁）。

６．「Ｐ．ティリッヒと科学論の問題」（東北学院大学キリスト教文化研究所『キリスト教文化研究所紀要』第 20 号、2002 年、1-31 頁）。

７．「ティリッヒとアインシュタイン－人格神をめぐって－」（現代キリスト教思想研究会『ティリッヒ研究』第５号、2002 年、1-18 頁）。

８.「環境と共生－キリスト教の視点から－」（比較思想学会『比較思想研究』第２９号、2003 年、28-35 頁）。

９.「キリスト教思想と形而上学の問題」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第 24 号、2004 年、1-23 頁）。

10. 「ホワイトヘッドの形而上学とプロセス神学」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第 25 号、2005 年、21-41 頁）。

11. 「キリスト教と進化論」（金城学院大学キリスト教文化研究所編『宗教・科学・いのち　新しい対話の道を求めて』新教出版社、2006 年、102-123 頁）。
12. 「自然神学の新たなフロンティア――脳と心の問題領域」（京都大学基督教学会『基督教学研究』第 27 号、2007 年、1-19 頁）。
13. 「現代キリスト教思想と宗教批判―合理性の問題を中心に―」（日本宗教学会『宗教研究』第 82 巻、357-2、2008 年、227-249 頁）。
14. 「ホワイトヘッドとキリスト教思想」（日本ホワイトヘッド・プロセス学会『プロセス思想』第 13 号、2008 年、25-36 頁）。
15. "Contemporary Christian Thought in Ecological Perspective,"in: *Tenri Journal of Religion*, Number 37, 2009, Oyasato Institute for the Study of Religion, pp.49-68.
16. 「科学技術の神学にむけて――現代キリスト教思想の文脈より」（日本宗教学会『宗教研究』第 87 巻、377-2、2013 年、31-53 頁）。
17. 「現代キリスト教思想における自然神学の意義」（京都哲学会『哲学研究』第 596 号、2013 年、1-23 頁）。
18. 「脳神経科学からキリスト教思想へ」（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第 2 号、2014 年、1-14 頁）。
（19. 「現代の思想状況における宗教研究の課題――キリスト教研究の視点から」（井上順考編『21 世紀の宗教研究』平凡社、2014 年 8 月刊行予定）。